

令和元年6月27日現在

機関番号：32654

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13150

研究課題名(和文) 李想白によるバスケットボールの技術・戦術に関する史的研究

研究課題名(英文) A historical study on basketball techniques and tactics developed by Sang-Beck Lee

研究代表者

及川 佑介(OIKAWA, Yusuke)

東京女子体育大学・体育学部・准教授

研究者番号：80592451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本バスケットボールの技術・戦術の変化について李想白の技術的関与を検討した。

昭和初期において日本バスケットボール界の競技力を向上させた一要因に、システムプレーの導入がある。システムプレーは1933年のガードナー講習会を大日本バスケットボール協会が開催したことで導入された戦術であるが、李想白はガードナー講習会以前に、『指導籠球の理論と実際』(1930)を著し、ここではシステムプレーのような戦術を積極的に論じていた。そして、その講習会後に行われた座談会で彼は最初にシステムプレーを話題にしていた。また、ガードナー講習会を企てたのは、李想白の意向があったのではないかと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昭和初期における急速な競技力の向上を李想白の視点からアプローチしたことに学術的意義があると考えられる。語学が堪能であった彼は、アメリカの書籍や優秀な指導者を招聘して技術や戦術の導入を試みている。その著しい成果は、大日本バスケットボール協会が設立と同時期に出版された『指導籠球の理論と実際』であった。

日本のスポーツ団体の中心で、朝鮮人である李想白が活躍していたことは社会的意義があると考えられる。その唯一の組織が大日本バスケットボール協会であった。バスケットボールに情熱を抱いた若者らがつくった組織は、朝鮮人であっても、優秀な人物を受け入れることが出来る柔軟性のある組織であったと考えられる。

研究成果の概要(英文)： In this research, we examined the technical involvement of Sang-Beck Lee with respect of changes in techniques and tactics in Japan's basketball.

One of the factors that improved the competitive power of the Japan's basketball players in the early Showa period was the introduction of system plays. System plays were the tactic introduced by the Dainippon Basketball Association at the time of holding the 1933 Gardner Workshop, however Sang-Beck Lee had authored the "Theory and Practice of Coaching Basketball" (1930) before the Gardner Workshop, and actively discussed tactics similar to system plays in it. Also, he was the first one to talk about system plays at round-table discussions that took place after the workshop. In addition, it is thought that planning the Gardner Workshop might have been the initiative of Sang-Beck Lee.

研究分野：体育科学

キーワード：相和記念館・李庄家文化館 Forrest C. Allen オリンピック正式種目決定 『指導籠球の理論と実際』 Jack Gardner ガードナー講習会 システムプレー 『籠球』

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

李想白らが発起人となり、昭和 5 年(1930)に大日本バスケットボール協会が設立された。大正末期から昭和 5 年に大日本バスケットボール協会が設立するまでバスケットボール界の運営を行っていた大日本体育協会の薬師寺尊正から李想白らが独立するような形で、大日本バスケットボール協会が設立された。それは、設立する会議に現れた薬師寺尊正を会議に参加させなかったのも、隣の部屋に新聞記者を呼んでいたのも李想白だったからである。そして、この協会の設立が、YMCA のバスケットボールから学生らのバスケットボールへ完全に移行したことを示す出来事であったと考えられる。

大日本バスケットボール協会では、規則委員、審判委員、競技委員、編纂委員の四つの委員会が設けられた。李想白は大日本バスケットボール協会の規則委員と編纂委員を務めていた他、審判委員と競技委員にも関わっていた。その一例として審判委員については、1936 年に行われたオリンピック・ベルリン大会で李想白は日本人としては初のバスケットボールの国際審判員となり、草分け的存在となっている。また、李想白は競技委員会に関しては、昭和 5 年(1930)に『指導籠球の理論と実際』を指導者育成の意を込めて出版している。さらに、技術指導のため全国を東奔西走し当時の日本バスケットボール界に、李想白の理論が行き渡ったと評されるほどであった。

李想白の論稿は、大日本体育協会による『アスレックス』(1922～1932)や大日本バスケットボール協会の機関誌『籠球』(1931～1942)など、数多く見受けられる。そして、そうした論稿で技術・戦術を扱う時は、他の資料を基に彼の考えを記しているものであるが、その中で彼が松本幸雄の『籠球研究』第 7 号に寄稿した「コーチの類型と進化」だけは、李想白独自の立場でコーチの技術・戦術面に即した分類を思うがまま叙述している。その「コーチの類型と進化」では、フォーメーションやセットプレーという戦術が連結することでシステムとなり、システムに速攻法(奔放型)が加わると科学的プレーへと戦術が成熟していくことを段階的に記されていた。李想白は、コーチの類型における成熟段階を示しながら、日本バスケットボール界のチーム戦術の移り変わりや競技水準との関係、及び今後の技術・戦術の方向性を考えていたのである。

## 2. 研究の目的

李想白(1903～1966)は昭和 41(1966)年に日本政府から勲 3 等旭日中綬章、韓国政府からは昭和 45(1970)年に無窮花大勲章を与えられた。日本政府の賞勲局が書き残したメモ書きには「元日本体育協会専務理事 韓国オリンピック委員会委員長 国際オリンピック委員会委員 わが国スポーツ界の発展、または、日韓国際親善に寄与」と記されている。

昭和 5 年に大日本バスケットボール協会が設立したがその中心的人物が彼であった。大正末期から昭和初期にかけて各スポーツ団体に協会が設立された中で、当時、朝鮮人が日本のスポーツ組織の中心に立ったのはバスケットボールのみであった。大日本バスケットボール協会では李想白は、組織の運営、技術・戦術の導入や指導、競技規則や審判、機関誌の発行など、ほとんど全てに関係していて、技術・戦術については、「全国的には理論家李の説が広まっていった」といわれた。大日本バスケットボール協会を設立後、日本のバスケットボール界は組織的、競技的に発展は続き、バスケットボールがオリンピックの正式種目になった昭和 11(1936)年のオリンピック・ベルリン大会に出場するほどまでの隆盛をみせた。

李想白は昭和 14(1940)年 6 月から早稲田大学在外特別研究員として中国に行き、バスケットボールとはほとんど関わらなくなっていったことを考えると、彼は数年の間に日本のバスケットボール界の改革を行い、発展させたことになる。そこで本研究では日本バスケットボールの技術・戦術の変化を李想白の視点からアプローチすることで彼の技術的関与を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究では、昭和初期において李想白がバスケットボール界に果たした技術的関与を明らかにするため、彼の著書・執筆、活動等から彼の思考を考察する。そして、バスケットボールの黎明期を如何にして形成したのかを、彼の活動を「書籍・機関誌での執筆」、「技術・戦術の導入」に焦点を当てながら、研究を進める。特に、体育・スポーツ史では、技術史を深化させた研究が、決して多いとはいえ、本研究は、技術史研究の一定の基軸になることが考えられる。また、バスケットボール史及び李想白に関する資料収集は、ほとんど終えているが、ソウル大学にある「想白文庫」と、大邱にある彼の墓や相和記念館・李庄家文化館の資料を収集し、さらに、彼と彼に関する資料を繋げ、具体化するために、李想白に関係する者からのインタビュー調査を行った。

### 4. 研究成果

#### 李想白について

「李想白」と名前の「想白」は韓国でいう「号」に当たり、「李相佰」という漢字を名前に用いることが正しい。しかし、彼が日本バスケットボール界で活動していた時期の書籍や記事で自らが「号」である「想白」を用いていたため、本稿では「李想白」と名前を表記することにした。

李想白は昭和41(1966)年4月14日にソウルの病院で心筋梗塞のため逝去した。彼の墓は大邱の家族墓地の一角にある。この家族墓地は広い敷地であったが、松の木に囲まれた丘の上で近隣から見えない静かなところに位置していた。家族墓地がある敷地内には、李想白の孫のお宅と相和記念館・李庄家文化館がある。

李想白は明治36(1903)年8月5日に大邱(韓国)で、父・李時雨、母・金慎子の4人兄弟の三男として生まれた。李家は書籍や新聞に取り上げられるような名家であり、彼は祖父、父、兄弟の影響を大きく受けて学問に親しんで育った。次男の李相和(1901～1943)は混乱の時代を生きた民族詩人として知られていることから記念館の名前に使われている。相和記念館・李庄家文化館には、李想白が10歳の時の家族写真が飾られていた。

李想白の墓の裏側には以下のことが縦書きに朝鮮語で記されている。

天性に恵まれ優秀で早くから伯父小南一雨が志士養成を目的に創設した友弦書樓で修学し、大邱高等普通学科を修了して、日本の早稲田大学社会哲学科を卒業後、中国に行き造詣を深めることに努めた。光復(大韓民国独立)後にはソウル大学校文理工科大学社会学科教授として後進の育成に尽くし、同時に学術研究に没頭して、韓国文化史研究論文、李朝建国の研究等多くの著書と論文を発表、学会で偉大な地位を築いた。1954年には学術院会員に当選、1955年にはソウル大学校で文学博士の学位を授与された。博士は体育面でも卓越した技量を発揮し、当時の難しい時勢の中、早くから日本体育界で活躍、韓国の運動選手が国際舞台に進出する基礎を造成することに尽力して、八・一五(終戦)後アメリカ軍政下にも関わらず、大韓オリンピック委員会を組織、国際オリンピックに参加して独立国家としての資格を得ることに成功した。1948年にアジア競技連盟の会員国として正式加盟、自身が実行委員に選任されて、世界的にアマチュアスポーツの発展に寄与、1964年には国際オリンピック委員に推戴され、韓国の国際的な地位を一層高めた。博士は韓国社会学会長・東亜文化研究所長及び大韓オリンピック委員長をはじめとして、数多くの団体の委員また会員として我が文化界でめざましい活躍をなされ、1963年には建国文化勲章を受章、オーストリアや日本等の外国政府からも功労勲章を授与されその功績が称

えられた。博士は 1966 年 4 月 14 日に 64 歳という若さで惜しくも他界されたが、その気高い人格と数多くの業績は歳月にも褪せることなく光を放つ。

この李想白の墓には、日本バスケットボール界での活躍について触れられていないが、体育・スポーツ界で国際的に活動していたこと、そして、ソウル大学の教授として学術的な成果を上げたことなどが記されている。

2008 年 8 月の調査時、李想白が所有していた書籍は、「想白文庫」として計 6,206 冊がソウル大学に所蔵されていた。この書籍は彼の死後に妻の金貞定がソウル大学に寄贈したものである。そのうち、一般図書として 4,514 冊はソウル大学中央図書館に保管され、古書として 1800 年代の書籍は 1,692 冊が古書資料室に保管されている。

また、早稲田大学第一高等学院で、当初、李想白は軟式庭球を行っていたが、浅野延秋らのバスケットボール同好会に出会い、この時から李想白は、バスケットボールと関わっていった。

昭和 51(1976)年 3 月、李想白の 10 周年忌を記念した大会が韓国で行われ、そこに早稲田大学が招待を受けた。この遠征が契機となり、昭和 53(1978)年から現在に至るまで毎年、両国の学生選抜チームによる、「李相佰杯争奪日韓学生バスケットボール大会」が開催されている。なお、生前、李想白は昭和 15(1940)年 12 月に、大日本バスケットボール協会が行った創立 10 周年記念式典で功労者として表彰されている。

#### 大日本バスケットボール協会での李想白の活動

李想白は大日本バスケットボール協会の理事を担い、献身的な活動を行っている。その協会では、四つの委員会(編纂委員、規則委員、審判委員、競技委員)が設けられた。彼は大日本バスケットボール協会の編纂委員と規則委員を務めたが、審判委員会と競技委員会の委員ではないため、その委員会に関わっていたわけではない。例えば、審判委員会については、昭和 11 年(1936)に行われたオリンピック・ベルリン大会で李想白は日本人としては初のバスケットボールの国際審判員となり、草分け的存在となっている。そして、競技委員会については、大日本バスケットボール協会の設立と合わせたように、昭和 5 年 10 月 18 日『指導籠球の理論と実際』を指導者育成の意を込めて出版している。この書は当時の日本におけるパイプ的な存在であり、技術向上に寄与したと述べられた。さらに、彼は技術指導のため全国を東奔西走して当時の日本バスケットボール界に李想白の理論が広く行き渡ったと評されている。実際に、彼は早稲田大学の監督を務め、第 11 回(昭和 7 年)と第 13 回(昭和 9 年)の全日本選手権大会で優勝させている。

上記したように、李想白は大日本バスケットボール協会の活動のほとんどに関係していたように思われる。その中でも編纂委員としての活動は著しく、例えば、協会の設立の翌年から発行をはじめた機関誌『籠球』(昭和 6 年～)では、昭和 6 年から昭和 17 年の間に 43 回の執筆(座談会を含む)を行っている。『籠球』は全 34 号(昭和 17 年まで)であったこと、彼が昭和 14 年 6 月から早稲田大学在外特別研究員として中国に 2 年 6 か月滞在していたこと、昭和 15 年度から彼は大日本バスケットボール協会の理事を外れたことから、『籠球』での 43 回の執筆はかなり多いといえる。

大日本バスケットボール協会は、新たな事業として全日本選手権大会競技規則の制定、競技の指導、バスケットボールに関する年報の発行を朝日新聞(東京)で発表している。その事業の一端を、『籠球』は担っていたといえる。

#### 李想白による技術的動向

李想白の名著『指導籠球の理論と実際』(昭和 5 年)は、大日本バスケットボール協会の設立に

合わせたかのように出版されている。その書の自序によれば、もっと早くに出版しようとしていたようだ。『指導籠球の理論と実際』は、総頁数 619 頁の大作であり、昭和初期に最も注目された書籍で、出版した意図とすることは、指導者の育成や競技力の向上であったと考えられる。

オリンピック・ベルリン大会(1936)で日本は、大正 6 年(1917)から昭和 9 年(1934)までの極東選手権競技大会で、ほとんど勝つことが出来なかった中華民国に 35 対 19 で快勝して、このオリンピック大会で敗者復活戦から勝ち上がり第 4 位になったポーランドにも勝利(43対31)している。そして、次大会に予定されていた幻のオリンピック・東京大会に向けた準備の中で行われた昭和 14 年(1939)のカナダ(オリンピック・ベルリン大会で 2 位)との日加対抗籠球競技会では、対等に戦えるほどに日本の競技力は向上していた。この時期のことは日本バスケットボールの「最盛期」、「黄金時代」といわれている。つまり、上記した国際大会等の試合結果や内容を見ると、大正期から昭和期に入った頃は、日本の競技力は国際的に低かったが、昭和 5 年(1930)に大日本バスケットボール協会が設立されて体制が整い、10 年も経たないうちに、競技力が急速に向上したといえる。

日本バスケットボールの黄金時代、昭和 14 年(1939)の日加対抗籠球競技会で日本は「8 の字戦法」という戦術・システムプレーを用いてカナダに勝利している。そのシステムプレーは、昭和 8 年(1933)に大日本バスケットボール協会が、約 1 ヶ月に渡って、東京、大阪、京都、新潟、名古屋で開催したジャック・ガードナー(Jack Gardner)(以下、「ガードナー」と表記)による講習会で紹介された戦術であった。

ガードナーによる講習会の開催意図は、「国際場裡に進出するに有利なる實力を収穫」と記され、国際大会を意識していたことがわかる。講習会においてガードナーは「日本にはまだ、攻撃にも防御にも一つの活きたシステムがない。システムのない籠球は、いくら練習したつて駄目」だと主張しながら「システム」の必要性を訴えていた。講習会の後、日本のバスケットボール界では「システムプレー」という言葉が「籠球の合言葉の如く流行」したようであり、日本のバスケットボール界は戦術として「システムプレー」を取り入れようと試みはじめたのであった。

この「システムプレー」の導入によって、日本のバスケットボールの競技力は向上したと回顧録等で記述されており、昭和 8 年のガードナーによって、はじめて「システムプレー」は伝えられたかのように協会の年史では示されていた。しかし、すでに李想白が昭和 5 年発行の著書の中で「システムプレー」の基となるような戦術を紹介していた。その中には「システムプレー」である「バリーシステム」とほとんど同じ動きをする戦術も示されていた。

また、李想白はガードナーによる講習会後に行われた座談会で「アメリカで所謂システム・プレーが出来て、日本の大學でどうしてそれが出来ないかといふことは僕ら随分考へた」と述べていたように、ガードナーの来日以前から日本に「システムプレー」を取り入れようと試行錯誤していたのではないと思われる。そして、この座談会の席でも最初に「システムプレー」を話題にしたのも李想白であった。

昭和 8 年(1933)、「システムプレー」という新しい戦術を取り入れようとした時に、「システムプレー」とドリブル技術とを考える必要性があった。それは、昭和初期にドリブル技術を戦術に用いることを戒める風潮が広がっていたためである。そのドリブル技術と「システムプレー」との問題を克服したことで、「システムプレー」は定着していったと考えられる。ドリブル技術と戦術には密接な関係があることを、李想白は昭和 5 年(1930)の時から気付いていた。彼は『指導籠球の理論と実際』の中で、ドリブル技術を攻撃的に利用したい気持ちと、当時のドリブル技術を戒める風潮との間で葛藤していたようである。

以上のことから、システムプレーは昭和 8(1933)年のガードナーによる講習会を大日本バスケット

トボール協会が開催したことで導入された戦術であるが、それ以前に李想白はシステムプレーの導入の必要性を抱いていたこと、そして、ガードナーによる講習会を大日本バスケットボール協会が企てたのであるが李想白の意向があったのではないかということが考えられる。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

及川佑介「日本バスケットボール史における李想白の功績について - 史料別にみる評価 - 」東京体育学会、第9回大会、2018.3)

〔図書〕(計 1 件)

監修・掛水通子、編著・山田理恵、及川佑介、藤坂由美子

『身体文化論を繋ぐ - 女子・体育・歴史研究へのかけ橋として - 』叢文社、2019.3

〔その他〕

ホームページ : <http://oikawa.matrix.jp/>

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

研究代表者氏名 : 及川佑介

ローマ字氏名 : OIKAWA Yusuke

所属研究機関名 : 東京女子体育大学

部局名 : 体育学部

職名 : 准教授

研究者番号 (8桁) : 80592451

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。